

探しもの

阿部千絵

突然鳥のようなけたたましい叫び声が出た。もぞもぞとぐもぐもった声がかげ、それに覆いかぶさるように甲高い声が続く。義父と義母に違いない。叫び声がかげ、何かかドスンと落ちるような音もしてきた。見に行こうかどうしようかと迷い、そのまま固まっっているうちに静かになった。

洗濯物を干そうと思っている時、またどたんという音がした。まだ二階にいたので下に下りて行くと、上で電話が鳴り、急いで取りにまた階段を上った。ついだに眼鏡をかけ、駆け下りて行って見ると洗濯かごが倒れていた。義父ではなかったか、とほっとして今度は義母を探したが家の中にはいない。携帯電話が部屋で充電中になっている。また携帯を持たずに出かけてしまったのだろう。私はようやく人心地がつき、コーヒーを入れようと台所へ入った。

娘が小学校へ入る前にと同居のために改築してこの半島に移り住んで一年になるが、義父は私に来てから今までに三回ほど倒れている。一度目は飲みすぎてトイレで倒れ、そのまま寝てしまっていた。その時は誰も気がつかず、朝になって夫が見つけて引きずりだしていた。

二度目は目眩がすると言って倒れ、タバコの吸いすぎであると医者に言われた。それからしばらく酒もタバコも控えていた。

三度目は今年の夏、熱中症で倒れた。三度目が一番深刻で、しばらくの間意識が戻らなかった。その時は義母が旅行中であつたため、私と夫が付き添って緊急入院した。温室の中で倒れているところだった。船乗りであつた義父は退職してしばらくしてから農業をし始めたのだが、慣れない中で無理をしていたのか、いつから倒れていたのか我々は全く気がつかなかった。その時は点滴をしてもらってすぐに意識が回復し、とりあえず退院しても良いと言われてすぐに帰ってこられたのだが、それからしばらく心配で一日一回は温室を覗くことにしている。

自分は休日なので何も用事はない。今日は二人とも出かけたのだろう。夫も遅くなると言っていたし、幼稚園のお迎えの時間までしばらくのんびりしようとソファァーに深々と腰かけた。

義父は船乗りであった。長らく海外にいてはしばらく日本に戻る、といった暮らしをしていたため、この辺に友達は少ないらしかった。それは今の所私も同様であり、義父とよく買い物に出かけたり食事をしに行ったりもした。私がメールをすると大体三分以内には返事が来た。私は義父にメールを試してみた。電話は方言があるので聞き取れないと言われることが多いらしく、電話を嫌がったので、メールならばまたすぐに返事が来るだろうと思った。

しばらく待ってもメールの返事がこないで、日盛りの中ウバメガシの生け垣を剪定していると、こちらをまじまじと眺めているおばあさんがいる。まるで奇妙な生き物を発見した時のように、瞬きもせず目をまんまるにしてこちらを見ていた。私と目が合うと、おはようでもこんにちはでもなく

「あんだこの人だね」といきなり聞かれた。これは引越し当初から何回も聞かれているが、おそらくもつと詳しくどこで生まれたかを聞かれているのだと思ひ町名を答えると、

「久兵衛さんのとこかい」とおばあさんはさらに尋ねてきた。久兵衛さんというのがどこかわからない。たぶん違いますけど、と口の中でもごもごいうと

「どこから来た」とさらに尋ねる。

「他県からきました」と答えると

「ああ、世間の人か」とおばあさんは急に腑に落ちた様子で私から去って行く。世間の人じゃあ、と口の中でもごもごとつぶやきながら。

だれもない通り沿いにはみだした植木をひたすら切り続けた。しばらくすると義母は帰って来たが義父は戻ってこなかった。先ほどのおばあさんが軽トラックに乗ってまた戻ってきて、

「あなた、アサリいるか」と聞くので

「大好きです」と答えると

「なんか容れ物持つといで」と言う。急いでポウルを持っていくと大きな手でザラザラとポウルいっぱいアサリを入れてくれた。その後ハウスをのぞいてみたり近所をさがしてみたが、義父の姿はなかった。車があるので、それほど遠くに行っただとも思われない。玄関に入り、帰ってきた義母にどこに行ったか聞いたが知らないと言う。親戚に会いに島にでも行ったかもしれないがこんなことはよくあると言う。おばあさんに話しかけられた件を伝えると笑っている。

「近所にはとりあえずにこにこと、笑顔で」といつも義母は言うのだった。そこで私は

逆に変に思われそうだがこの辺を走る時は車の中でも笑顔を作って運転している。義父は結局夜になっても帰ってこなかった。

そのうち夫が帰ってきた。

「お義父さんがまだ戻らない。お義母さんはまた島へでも行ったんじゃないかと言うけど」と私は言った。

「またか。こんど言っとくよ。勝手に出かけたりせずに一言断ってから行けっ」と夫は言った。こんな事はしょっちゅうなのかもしれない。だがすぐに来るはずのメールの返事はまだ来ていない。いつもすぐに返事が来ていたのに、と思うと体の芯を食うような今までにない寂しさを感じた。

夕飯に頂き物のアサリの酒蒸し、味噌汁を作って出した。おれは貝は食わないよ、と夫は言った。そんな事は今まで気がつかなかった。義母も、私もまるで貝はだめ、と言って箸をつけない。

私と娘だけ食べる事になった。私は食べた。初めてこんな大量の貝が皿に乗るのを見るのかぼかんと口を開けて私の様子を見ていた娘も、一緒になって食べ始めた。冷凍しておいても誰も食べないのだから、とどんどん食べていった。貝は砂もなく、いつもより美味しく感じられる。時折貝殻の中に小さい蟹が入っている事がある。娘はその度に大きな声を上げて喜んだ。皿の上の一つ一つ蟹を並べて行く。食べている私を義母と夫が見つめている。

「美味しい？」と義母は聞く。

「はい」と私は答えた。

次の日もまだ義父は帰って来なかった。皆普通に朝ご飯を食べている。娘は幼稚園の前に少しだけ近所の友達の家でウサギを見に行つてくると行つて朝早くに出かけて行ったので、こちらもちゃんと帰ってくるか心配で何度も玄関を出入りした。

「今日の予定は」と義母が聞く。

「お義父さんを探しに行こうかな」

「島にいるから大丈夫だろう」と夫は答えた。

私は島の旅館に電話をかけてみた。時間が早すぎるせいか録音された音声を受付時間は九時からと繰り返すばかりだった。義母はシルバー人材センターの仕事で海水浴場の駐車場係をするために出かけると言い置いて出かけた。その日も洗濯をしたり、娘の送迎をしたり、いろいろな雑用をしているうちになんとなく過ぎてしまった。

今日はアルバイトの日である。コンビニと八百屋を混ぜこぜにしたような小さなスーパーである。ここでレジ打ちを始めた。お客さんは常連ばかりだが全然覚えられない。娘曰く、お母さんはいろんな人に関心がないから名前を覚えられないのだと言う。自分もそれはそうだと思う。娘の友達の名前もごく親しい数人しかわからない。ましてやそのお母さんの名前など全く出てこない。だから接客業などは無理かなと思ったが、すぐに採用が決まった。田舎のことでもかなりアルバイトの人手は不足していたらしい。

しかしこのバイトも私より十歳ほど年上の男の店長と話が合わない。野菜や切り干しを並べていても落っこちとして「ああ」と大きな声を急に発したりしてびっくりすることが度々あるので、入った途端にやる気がだいぶなくなっている。声を急に張り上げないでください、とも言えずにいる。そして当初週三日の予定が、来週に至っては週一の間隔に減っている。その件に関しては無言の圧力を感じている。客の少ない時期だからなんとか許されたものの、自分がいつまでもつか不安になってくる。

店長はパソコンが苦手らしく、わからないことがあるとじっとパソコンの前から動かなくなり、残り何分などと言う砂時計様の目盛りをずっと眺めては口の中でブツブツと呪詛のような言葉をつぶやいていたりする。私も請われて表計算くらいは入力するようになったのだが、気がつくとも後ろで見えていたりして非常にやりづらい。しかも店長はいつも私の進行方向にいて邪魔をしている。商品を棚に入れようとすると棚の前において、合間に掃除をしようとするレジ横の通路を塞いでいて、その度にぶつかりそうになる。なんとか一日こなした。帰るときが一番楽しい。仕事をしている最中はいつも、こんなことをしている場合だろうか、と思いつながらやっている。ドアを開け、逃げるように家に帰る。

日曜日だったが夫は仕事があると言って午前中だけやってくると出かけて行った。何度も携帯を見たが義父からの連絡はない。洗濯物を干していると、どたと音を立てていたのは本当に義父ではなかったのか、と心配になり、義父の部屋の中へ入って見たが、そこにはきれいに整えられたベッドと靴下が一組枕元にそろえてあるだけだった。旅行に行くのに準備をしていた形跡もない。

いつも使っている皮のポストンもそのままである。旅行に行ったなら服も少しはなくなっているはずだがそのままある。いつも洗濯しているので義父の服はだいたい把握しているつもりだ。部屋をいろいろ眺めていると娘が玄関のドアを開ける音がした。

「お母さん、セミ取りにいこう」と娘は言った。

「虫きらいじゃなかったっけ」

「昆虫公園があるんだって。近くに。美優ちゃんがそう言った」

「行ってみたい」

「うんわかった」

公園は海にほど近いところにあつた。遠くに海岸線が見える。蟬だけではなくクワガタやカブトムシがいることもあり、公園のそばには博物館がある。捕まえて持つて行くと芸員さんが説明してくれる。娘は恐る恐るではあるがクワガタをお菓子箱の中に入れ、話を熱心に聞いている。

クワガタは、蜜のある木にあつまります。と優しいお兄さんが説明している。これはコクワガタ、これはヒラタクワガタ、そしてこれがオオクワガタです。

娘は小さいとき、しゃべりがそれほど得意ではなかった。いつまでも言葉を発しなかった為、ずいぶんと心配したものだ。医者に連れて行ったり児童センターで相談したりした。二歳前後でまだ話さない子はたくさんいますよ、と言われるのだったが、それでもまんま、とかあーあ、とか二つくらいしか発語されないのは親として心配だった。ようやく三歳頃になって言葉が出てきた時は、非常に滑舌がわるく聞き取れなかった。三歳後半くらいにはようやくこちらにも分かる言葉がたくさん出て、嬉しかった。娘の言葉をすべてノートに書き写した。

中でも好きだったのは、娘らしい言い間違いである。トンボはボンドになり、セミはベビになった。他にももっとあったのに、忘れてしまった。あのノートを探しておかなくては。

「お母さん、今教えてもらった木をのぞいたらまたこれが穴の中にいたの」と娘は興奮して、クワガタを手のひらに乗せてこちらにみせる。

「家で飼っていい？」

「いいよ。ちゃんとお世話の仕方分かる？」

「お兄さんに聞いた。本ももらった」見ると昆虫の冊子が手に握られており、中には丁寧なイラストが書いてあつた。

「これならだいじよぶ」と娘が言う。娘の頭越しの海に見覚えのある車が滑り込んできた。あれは義母の車ではないだろうか。そろそろと腰をかがめ、車から何かを下ろしているようだ。遠目でよく見えないが、それは大きな箱のようにも見える。

「あーちゃん、あれ見える？」と娘に聞くと

「どれー」と海岸に目をやる。

「あれ、おばあちゃんの車じゃない？」

「うーん、よくわかんない」

「あの箱は？」

「わかんない」

すぐに家に帰ればわかる。娘をせかして車に乗せる。

「もう帰るの」

「うん。いったんクワガタさんを家において、それから昆虫ゼリーとか買いに行こう」

「わーい」と娘は喜ぶ。

「昆虫公園面白かった」

海岸沿いの道路を制限速度内で、できるだけ飛ばしながら帰った。

家に帰るとすでに義母は帰っていて、おかえり、と言った。やはり見間違いだったのかもしれない。

「お義父さん、まだ島ですかね」

「島だら」と義母は答える。

「なんか鞆もそのままだし心配で」

「まだ徘徊するような年じゃあないで大丈夫」と義母は笑う。

「おばあちゃん、クワガタ捕まえた」

「あれまあ、すごいねー。虫触れるようになったんだ」

「うん。昆虫ゼリー買いに行くの」

「行つといで」と義母はお小遣いをくれた。

娘がいなくなったので私は義母に聞いてみる。

「一度、島へ聞いてみた方がいいでしょうか」

「絶対にいるから大丈夫よ。そのうち帰ってくるから。あそこは親戚だからね」

「でも、昨日も電話してもつながらなかったし」

「まあ、あの人耳が遠くなってきたからね」島では母の姉が旅館をやっているのだが、電話の応対にも苦勞するのでそろそろ旅館もやめようかという話になっているらしい。

私はもう一度島へ電話してみた。誰も出なかった。島へは三十分くらいあれば行ける。そこから歩いて十五分もすれば旅館に着く。問題は朝一の往復便しかないことだ。それに間に合わないと午後の便になり、帰りは次の日になってしまう。暇を見て島へ行ってみよう、と私は思った。

「ちょっと、ひいちゃんひいちゃん」と義母が呼ぶ。私の名前はひさよである。夫はソ

ファーでうたた寝をしている。

「この間、ピカピカしたUFOみたいなのが見えたのよ」辺りは暗くなり始めていたが、遠くに光るUFOが見えるにしてはまだ明るい。

「写真を撮ったの」義母は写真を見せる。そこには縦に切ったアロエかキュウリみたいな形の黄色の光が写っている。

「ねえ、おかしいでしょう」と義母は声を潜める。

「どのへんですか」

義母は海の方を指差した。

「そういえばこの間、海にいませんでしたか」

「いつごろかしら。最近はしょっちゅう海にいるから。海の家を担当もやっていたしね」
「昆虫公園から見える海で似たような車を見かけたもので」と私は答えた。

「おかあさんはあーちゃんに見えるかなって聞いたけど、あーちゃん見えなかった」

「そうなの、あーちゃんあんなところにいたの」と義母は私にでなく娘の方を向いて言う。

「おばあちゃんじゃないよ」

「そっかー」と娘は答える。

「あーちゃん、おじいちゃんは大きなUFOに連れて行かれたと思う」私はびっくりして娘を見る。

「だって、おばあちゃんがUFO見て、おじいちゃんはぜんぜん帰って来ないから」娘は大真面目だ。色白の顔を赤くして私を見ている。

「それは面白いわね」と義母は大笑いしている。最近入れたばかりの歯が白く光っている。

「あーちゃん、お母さんと一緒に島へ探しに行く」と私は聞いた。

「そんなことはしなくていいわ。あーちゃんだって幼稚園があるんだから。暇を見て私が連れてきます」と義母は言った。

「そんなことよりね」

「あそこにも見えるのよ。あれおかしくない？」私が空を眺めると、そこには火星が輝いている。

「あんなにも柿色の星はないわよね？」否定しようかしばらく迷った後私は

「あれは火星だと思いますよ」と答えた。

「でも写真を撮るとほら、こんな変な形に写るのよ」画像を見ると確かに不規則な軌道を描いた光が見える。しかしことによるとそれは手ぶれによるものかもしれない。

「あなたも撮ってみて」と義母が言うのでしぶしぶ自分のスマホを取り出して夜空にカメラを向けた。画像を見るとただの光る点が写っている。

「おかしいわねえ。私が撮るところなるのに」

我々はただ黙って夜空を眺めた。しばらくして光が全く動かないので、まとわりついてくる蚊を追い払いながら、家に入った。

星を見て、それから娘を寝かしつけようと部屋に入ると、UFO騒ぎには飽きてしまった娘はもう寝ていた。なかなか寝られないので外に出ようかと考えた。月は明るく、外からは何か音が聞こえてくるようだった。初めはささやき声のようであり、さらに耳が研ぎすまされて注意深く聞いていると、楽器の音や歌らしき声が聞こえてくる。

ここからしばらく歩くと海岸へ出る。私は夫も娘も義母も家族全員が寝ている事を確認してから外へ出た。外は明るく、月が大きく出ている。私は音のする方へ歩いて行つた。海岸には遠目で見ても多くの人々にぎわっているようだった。一段高くなっているところには楽器が置かれており、その周りに人が集まっている。

「海岸でコンサートか」と私はつぶやいた。町中の人たちがここに集まっているのではないかと思われるほどの人出だった。

歌声の主は地元で有名なバンドらしく、この辺の方言をネタにした歌などもあり、周りでは大勢の娘達が騒ぎ、踊り狂っていた。私もその渦の中に入り、歌に聞き入った。海岸には老若男女、すべての種類の人が集まっている。演奏は安定感があり歌声も伸びやかで人々はその中心に向かって集まり、気がつけば私も手を振りながら夢中で踊っていた。

ひとしきりの熱狂の後、曲はバラードに移り変わった。私は海から星を眺めた。やはりどう考えてもお母さんがUFOだと言っていたのは火星だと私は確信した。ステージに目を移すと、その中のメンバーの一人に私はひどく心を動かされた。

透明感のある男だった。三十代後半くらいだろうか。しかしその世代が持っているであろう家族や仕事のしがらみといったものを全く感じなかった。人間の感じすらしなない。つるんとした肌の質感はマネキンのようだ。曲は再び激しいものに変わり、しばらくの間は人の波に揉まれ、熱狂の渦の中に巻き込まれて行った。

しばらく呆然としていた。いつの間にか演奏は終わり、周りの人は帰っていったらしく私の横には老人が一人残っているのみだった。

「あんた、どこの人だ」と老人は尋ねた。私がしばらく答えを迷っていると、

「世間か」と聞く。

「はいそうです」と私は答える。

「こんなところ何もないら」と老人は続けた。

「そんなことはないですよ」

「星がよう見えて、アサリが採れるくらいかな、取り柄は」

「世間から来たらつまらんら。嫁に来たか」

「はい。でも今の演奏、素晴らしかったです」

「あんなもん、東京に行きゃいっぱいいるら」

「そんなことはないですよ」

「あんたもいずれまた出て行くかもしれんな、何もなくて」何がおかしいのか老人は声を立てて笑った。前に一本金歯があった。

「それにしてもここには近づかんほうがいいで。この辺の海にいて、遠くを眺めとって行方不明になった者が何人もおる」私は義父のことを思い出して老人の顔をじっと見た。「あんたも気をつけたほうがいい」

気がつくとも老人は私が目で追っている間にいつの間にか闇に紛れ、草藪の方に入っていて消えた。まるで幻みたい。私も帰ろうと元の海岸沿いの道路によじ登った。階段があるはずなのだが、どこに階段があったか既に忘れてしまった。老人と一緒に道に戻ればよかったのだが。

月明かりを頼りになんとか道までよじ登り、駐車場まで歩いた。行くまでに何台ものトラックが自分の横を通り過ぎていった。その度にこの真つ暗な道路で自分の姿は果たして見えているのだろうかと不安になり、道幅ギリギリまで避けた。

すっかり遅くなって家に帰ると夫も娘も同じ方向にくの字になって寝ていた。そつと横の布団に潜り込んだ。それから夢を見た。あの男の夢だ。息を吐き、汗を流し、こちらに流れ込んでくる歌声。星と人と歌と砂浜が一緒になり、くたくたと回り出す。見知らぬ女の人が逃げようと手を引く。いやだ、と手を引っこ抜くとガタガタ世界が揺れる。女の人はいつの間にか娘に変わっている。娘は私の手をしっかりと握っている。私はその手を外そうと肩をひねりながら抜こうとするが抜けない。どうしたらいいのかわからない。娘の顔は痛がっているようにも見える。私の手首も痛い。冷や汗をだらだら垂らしながら目が覚めた。

昨日砂浜でコンサートがあった話したが、夫はそんなことは全く気がつかなかったし、ウミガメの産卵の時期だからそんなことをするはずがないというのだった。浜辺にいたおじいさんの話をする、どんな男だったかと聞くので前に一本金歯があって、腰が曲がっていると答えるとそれはまっさんだな、とすぐに名前がわかった。うちは海のおばで、大概嘘ばかりついているから信用しない方がいい、ということだった。

珍しく娘がおとなしいので体を触ると熱い。

「熱があるかも」と言うと夫は

「今日は休ませた方がいいな」と言っていて仕事に出かけた。

一日中娘と一緒に家において、退屈があるので絵本を読み聞かせたりおかゆを作ったり病院に連れて行ったりしているうちにあつという間に一日が終わってしまった。家事は今日やらないと明日が大変になるので娘が寝たのを見計らって洗濯機を回す。いつもより少し多めの洗濯物をこなす。おじいちゃんを探すのは後回しだ。とりあえず、娘が良くなって風邪を治すことが重要だ。なんとなく娘の熱は自分のせいのような気がしている。義父にもう一度電話をして見たが、出なかった。心臓のあたりがまたチリチリとなった。おそらく携帯を充電していないのだろう、と夫は帰ってくるとそう言った。もう何日も帰っていないのに、心配ではないの、と聞くと

「もしも本当にいなくなつて、万が一自殺でもしていたらどうなると思う」と夫は急に思つても見ないことを言い出した。

「俺ら、年金が入らなくなるよ」私たちは毎月生活費として年金を一部家に入れてもらつていた。夫の顔を見ると冗談とも本気とも取れる無色透明な顔をして肉じゃがを頬張つている。娘は熱も下がり、夕飯も平らげた。明日は幼稚園行こうかな、と言うので明日朝起きてから決めようね、と言つて早めに寝かせた。

娘が幼稚園に行ったので、なんとなくまた浜辺に来てしまった。気がつくところに来ていた気がする。自分の中身がどろりと抜け出して流れ出るように、意識しないまま思つてもみないところにいる。義父は常に私に優しくかった。義父が履いていたサンダルによく似たものが砂浜に落ちてている。思わず拾おうとしたとき声をかけられた。

「ほい、何しとる」

振り向くと

「貝掘りは駄目だら」と言われた。どこの人だ、と言うので苗字を言うとおそこの嫁さんか、と納得してくれた。

「ここで何しとる」

「なんかここで、行方不明になった人がいるって聞いて」

「またあの爺さんか。嘘ばっかりついてる」

「あとここで歌を聴いて」

「それは、知らんなあ。何年もここにおるけど、そんな人ら聞いたことないわ。もうここに六十年もおるけど。まあ世間の人らだろうな。なんかわからんことはなんでも世間

の人らがやることだ。あんたとこのおじいさんも、東北出身で、何を言っとるかわからなかった。それで、今何しとる」

「島に遊びに行ってます」と私は答えた。

「いいご身分だな」とおじさんは嘆息した。そして私から急激に興味を失った様子で、浜の警備へ戻って行った。

宴会の準備はできているの、と義母に聞かれてすっかりそのことについて忘れていたことに気がついた。私がいつまでたっても近所の人の名前や顔を覚えられないので、一度近所の親戚等を招いて宴会を開こうということだった。義父がいないのにそんなことをするのも奇妙な気がしたが、義母はもうみんなに声をかけたから、というのだった。

午後六時に宴会が始まるとみんな自己紹介もそこそこに騒ぎ出し、自分も飲み始めてしまったのでそれぞれ名前を言ったりしたのだがもうすぐに忘れてしまい、騒がしいだけだった。お客さんがたくさんいてはしゃいでいた娘も疲れたのか早々に寝てしまった。最近の子はよくわからん、と言われたような気がする。娘のことを言っているのか自分のことを言われているのかわからない。お酒を飲みすぎてますます混乱してくる。

「なんだ、またお父さんはいないのか」と義父のことを言ってくれた人がいたので、

「そうなんです。多分島へ行っただと思うんですが」

「またか。あの人はすぐになくなるでな。若い時からそうだ」

「そうなのよ。誰も心配していないのに、この人だけ、ずっと心配して」とお酌をしながら義母が割って入ってくる。

「まああの人も養子で世間の人で、この辺にはいられんのかもしれん」

「東北弁で、何をしゃべっているかよくわからんし」皆一斉に笑う。

「そのうちに帰ってくるわよ」と義母は言う。寝てしまった夫を家に残し、みんなを見送るために庭へ出た。皆がいなくなった後で義母は一本の木を指差し、この木はうちの子が生まれたときに記念として植えた木なんだけど、もう枯れかけているわね、と言った。

朝起きると玄関にバケツに入ったアサリが置いてあった。義父はアサリを食べられるのだったか記憶にない。いろいろなことがとりあえず落ち着いたのだし、朝一の便に乗って行こうと決心し、幼稚園には早めに送って行った。娘を送り届けると海より一段薄い水色の空を眺めながら車に乗り、海岸をフェリー乗り場に向かった。

五キロほど走った後、道路を何か大きな黒い物が横断しているのが見えた。猫かなと思ひ私は車を止めた。そろそろと近づいてみるとそれは大きな牛蛙だった。海にほど近

いこの場所で蛙を見るのは非常に珍しいことだった。私はそれがゆっくりと道路を横断し、自分の車の前を横切って行くのをじっと見守った。それは信じられないほど長い時間をかけて進んで行く。蛙はゆっくりと道路の反対側の叢をめざし、センターラインを越えていざっていく。

空はさらに眩しさを増しはじめ、太陽は腕に暑く感じられた。朝一番の船は行ってしまった。次の午後の便を待っていると子供が帰ってきてしまう。今日も洗濯物をたくさん干さなくてはならない。私は狭い道を何度も切り返して車の向きを変えると、家の方に向かって走り出した。